





1272  
13

河海物考卷第十三

正六位上物語博士原惟良撰



第二十 着榮上

冬名 かきのわふくひよひのうけつてや

一名 えいも

いわく木の神を守る人ことをいふが此 常流と有り

一物を上下事

唐書例

礼記才一 曲禮上ト才二 檻弓上下

尚書

大甲

盤庚

說命

周禮

天官

冢宰

漢書

元紀上

元紀下

後漢書列傳才二十上下

和詔例

日本紀才一才二 秋代上下 うづくわの御才火  
やまとをのとひさわ奈ハト 十二ふ少アト十ニ 奥下  
たとくのとナス月ト

和漢書籍上下とていはゆる事中に作者より先りと下と  
らすもあは人の追立もあはれ礼記の曲礼下後今  
え植う上下の礼者もえす所よ西礼才一卷の中には下と之  
植うオニととくオニと下とえすより先り下トと  
うるかえ一とくとく米油背と勿連云列候れ礼記才  
三正義云鄭周錄云義周前篇以著繁多れら上下二卷  
又才火を上下とくらう後漢書引得と換じる次

朱雀院代れとあらざりみゆこのむ

藤裏葉よ六院院よ行幸わく一ゆき

あくへぐれつうと 靈運當遷 伊弉諾子

ちかくとくとくへんたいの源氏かくせう

室女楊源氏姓例

晚成天皇ニ女貞姫ニ豊後守翠姫ニ三位全姫尚約

以て是人弘仁五年八月八日

勅楊源氏姓

醍醐天皇ニ女源朝臣ニ源鷦鷯子醍醐守宣房ニ三位源朝臣ニ源鷦鷯宇多院室女一人楊源姓

あれとたのじしきめく

佐佐佐人ニくららニくらなりひよしよしよしよしよ

李亞王礼云天曆六年四月十六日太上天皇遷御仁

和院康子内親王正統也去三月十六日御本家

ゆくよしゆきとほりとほりと

レ

老のまほろかのうらこじゆくまくすくけふたふ  
あくまくとくへんす

こうこしのよそひよめりとおとそとしめんこ  
きみゆそせじくひゆせんくわくすふねり

以恨林客事之勝斗

これららの扇に

奉

人のやうの扇をもと思ひにちくわくふ

これ林の行幸のう

奉

若裏葉表に六院院へ行幸あらうハ林音月廿九日

レ

ありくは林とあるる

ゆりづくゆく

ゆくらでこよひ

所見の叶せんのとモ

ササ送立

六院院大らしきは油云あもとすゆうりにこ

レ

露院は葉葉表は冬候充養表葉大ね木一貞信云

次

昌泰三年三月廿九日

ほくくのれのれとよもんたち

たのあくまく

あくまくも

くゆれとよもん

あくまくも

うのゆかのゆかのきよみくらういゆどく

あくまくも

秋

周易に有る以一族 辨物

タライアラヌテ

毛詩曰窈窕淑女君子好仇 俗曰窈窕淑女同也 淑女  
仇臣に右也を閑雎く後是志同負もと右女宜為季

ノ姓也

トトクヨシ 云々 日本紀

じい人のんたつあく 平切類云也 利也 勝也  
キヤハチモトとととととと

ヒセトモ老とくね、室と瓦のからく、つまむるう  
くはくのうひく、くわくわうん女がゆうしてゆきくさと  
有ゆす孟子曰女子生うれあくを家父母へん人皆もくら骨又  
母え余様ぬき言瀬元藻わ穀除牆おほり父母國人皆

族

良氏文集

房言癡女人家女慎勿將才怪許人升庭引浪瓶止幅奔也

良氏文集

家司

モリノミコトノハタカヒトノムクニシテナリマス  
李ア王紀云天广六年八月廿七日太上皇御乳母加賀食柏  
告送云院御惱御至法入申遷文一宣之由去月一日年二  
糸院依わ玉主門外東内之左十七日八九日御惱危矣方吹  
以後頗年辰と六月後と表上皇御惱御萬十音才秋上實國鑑  
良久之入表定と臣若御惱至室亥刻至年四十一方爲飭乃  
仰りて御死云天广六年十一月廿九日昌子内軟王初服葬之  
上御絃腰治毛脂也御惱後内厨子不弁備朱沫譽日本復三倫  
脂月小臺二十九日復土三代偽學士軟王家歎烏犀内第一腰書  
法定朱雀院御上男女官食之仰居十余人召以復南席  
給酒者中丈職治福

モリノミコトノハタカヒトノムクニシテナリマス

朱雀院柏梁殿 東文公奉事曰後文乃素柏為庭也 柏殿古  
風古御在而也又九条右丞曆紀三月之日侍朱雀院柏梁殿情狀  
若モニ子孫太上法皇製探得復序

菱坐也 三月首夏于池上益思古之曲水也接柏梁以櫟東亭  
同紀林立栽松木皆是拾宋放示之为詠凡月之時而猶  
情若一一家也

モリノミコトノハタカヒトノムクニシテナリマス

御記曰康保式年十月廿二日己未百仰奉朱雀院入自永寧  
坊就馬場殿。案與移柏處接近者年代仍無秋草以  
復之柏敷燒也。後故之奉事云玄友新接柏敷四界列作早朝  
役今日暮也李ア王記云天广九年七月廿日太上皇遷之朱雀院  
扈從云之之如火之如火之如火之如火之如火之如火之如火之如火

候厥天皇弘仁八年男女衣服用麻



太上季封文入百二十文和方田文町

あうわとがやれり

伊勢

人乃せに先とくめでりふくすとくを聞か  
とくせんきとこ儲君

うしてくはうととくよふたういぢりを忠仁と美嘉  
ゆくじりくとくめむく月見とくま

日月流通景不休<sup>トキアト</sup>毛詠 日月逝天景不休<sup>トキアト</sup>詠

牛へすうら右左さんせく詩く 先セムとくせ

れあつてじとくわゆく 稲を

内膳自鳴階倅御膳を膳精と地<sup>ミツ</sup>高麗わづくの

飯

飯のゆきひしらかしゆもゆきとくれあくとく

機も御津

とくめん人のうちとよやさんめんとくとくとくとく

人

人

曾平云ねか辟女人滅人后者謂曰化自否が列又余不司可

人

人

而興已矣乞乞未參不<sup>シ</sup>故情<sup>シ</sup>白將乞孟子曰仁<sup>シ</sup>義<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>有

物<sup>シ</sup>方<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>於正夫乞以為慶年礼義由是者かる孟子後妻論<sup>シ</sup>

妻君云仁<sup>シ</sup>孟子曰

人るひにうりうりよみ人のまことうだらふ若

うりうりうり 呸咽也のうふせ

伊勢也次第文<sup>シ</sup>のゆかわうこし良<sup>シ</sup>也のうとくも

ようみゆくふうすうすうすうやくまみまきとくみ

とくみ

此をすれども「とくに」の如きはすこつうり

あくまでも「すくねる」が美なる

四宣云寧十筭する古今集貞觀十年也貞觀親王十筭同  
じかも仍多御記云延暦二年十月辛巳是日於あら陽尚  
約有原約信等十筭候未到極西庇障子酒席於殿あ庇自  
南宮弓浦れど而才又弓獨為約信南

弓弓弓弓弓後カナウ論既

正月正月のをすりに左ノ右ノの少少とよつても

由紀云れかア延長四年正月廿百五十九日有原約信來自慶應  
壬午亥卯甲子日朝稿あ葉奉入へ大入日甲子旨自院稿子  
日レ宴レ内宴祀立仁て年始正内宴唐太宗之四月正月  
三二日壬午子日件日行レ元人式は源氏等すりに四月二二日  
風氣ハタチあを子日使用え傍松樹八幡勝勢風高ハタチ松叶和葉裏

御殿口約言味え克調度重ね庵後林福序

## 十二禁あ葉

若葉 菊アキ 苣 嵴 蔡アキ 蓬 水蓼アキ あ

芝 茄アキ けずアキ なアキ の役あり向う役アキ と献アキ  
人アキ うアキ いアキ 併事アキ うアキ と役ありとあり大か礼アキ を

少人根アキ ハナアキ ヤハナアキ と役と用ひ小さくアキ 回祀アキ よみ  
七絆 蔷 薔 蕤アキ 苣 莖アキ 莖 蓬アキ 頭代佛座  
に十もつうて教アキ のぬと蟹アキ とせ玉アキ 初アキ 菜と搞アキ  
れと伎アキ と役アキ とせ玉アキ 仁和アキ 月アキ あ葉行アキ うれ  
あうれと蟹アキ とそりうれ

あうれのやアキ かの範アキ うれアキ とアキ うれ

放アキ 麻アキ のス通アキ とアキ 役アキ あ葉支せ

アキ

又傍壁地番箇脇息抜は事紫上二階院の處  
架めを傳子としてたりとんもり是所も勿義次

御祀は延年六文大富架馬仰殿庭西檻二枚を上浦に幅  
帛脩築踏石有アリ記事度而向東文大富同麻才一同

皆月右赤蘭丹御祀立荷傍大床子三脚を上立況爲便  
息一脚

既て人内けりニシムシムゆくとて 螺甸

延年六文御架馬架馬布立ニ尺臺前於厨子

空基

二基納付

同十六字記立三尺蔵経厨子多納付

詮服冬夏各八枚

かくそそりてこれよりゆきつさうのと

瘦敵紫木二階一脚

南上毛大根湯付枕松下階除童子丸苔下至双連一合次星庚梯連次後登

脚小五厨子二脚東延梯連一双モ下延梯連死毛毛等モ下

階梯 久春

れまくぬつせらんそんとほりうきちやうとほりう  
あきねとも 一切のわよりんかおづ然あやうとせ家道

立長崎年正月廿日御架馬到席自東方にて立梯

脚立派山銀水金浪花樹木

もくひやむく 用繩

大ねの御引出でやしにひんせとさんとすりにゆく

伊集院 緒へうすりをかくとらふ御の御引出とて

贋主大ねの志本板の同胞ノ男三十二才をもすり

しきとつ秋

人づくづくとすりゆすりあひのい

上東の邊より六十里をもひだりて山野に在る處

太政大臣

宗祇

之をうへてはやひたる事とぞとほり  
こあらへどもハシメよからてやうへのあまとぞとほじへ  
至れりのあまとぞとほじへ年比とぞとほじへ年比とぞとほじへ  
せりもつてこまゆきちくゆきもくそそくすりつともぐら  
報役 稲地 军役 拙技也

れくらあくらむふんれあうものより

正季六年御葉付記 信中榜 信主とせちの信主大寧所  
報玉行酒より信中榜 信主御下室と信石林屋所と信  
院院年同付記 一承女綱わら木綱伏て承女又以付と信  
院院信中榜軍中榜 ちくのいしよあま代あり

めりとく めりアリ

朱雀院へとむかひて けまゆれ偶々

かく人さへうこと

正季十三年高僧が死れ祀主今御内官委縫自縫相琴中榜  
アミタ源尾是克内報玉行酒と不石承年御付信  
カクのひづれ同辞 一承御行酒御付のせ 極  
人承ちてみゆきこわくとだくとつかくと  
お琴アミタヨロギ御叶記琴ノ万葉集傳用儀此ニ通支前  
云ひのむれ、不就漢家去、信上宿背付宣、代下公  
卿、人情、今云事、厄れ社、因、お推、但、御、古、松、  
膳、弓、音、曲、不、侍、有、善、

又既而天皇御書付書付、尚御廣升坐、く後御中御取れ覽

主深仰林學古意於後門於落卜方以之曲在大馬原傳日有  
之曲不附也故名之一聲凡音之長之短仍之大之小良峰家員  
賜令傳之又貢欽重官石友於晉升安景秋聲齊君之  
文波廣木皆即役內員保就重嘉勅余歌作之謡。持歌  
之復之在落卜林經爰之歌之中而歌之也文傳揚左多傳  
傳者歌太丘書指情之名也而名也天子所宜執之以多傳  
或名教主其王許之有之又左大昌雅傳之是欽王家傳深  
傳曰落大納公付件系川也。從右於前也。家傳之曰  
後考庫以那家雅系从範奉末約居常和絃傳不池主大昌傳付  
至云家。此既之歌比聖觸之右六法とりづくらむ。而  
てれと林系よりしづくと後人接ひよりうどりと  
來歌之ぐもとよ絃乃國の母地也。下にこまく。教よう  
説と云て毛傳林系林とひづきをいみる。歌傳爲  
ちやくのあゆむとひづきをいみる。歌傳爲  
物と合てそつこう。歌傳爲  
うつうく。いざくしてせは下へ。歌傳爲  
くせすり歌とひもかく。歌傳爲  
これ。歌傳爲  
宣陽歌。而えおう。歌傳爲  
是教人不絃絃而紙れ。傳凡納仁集教人雜文。歌  
こうからん。歌傳爲  
うつうく。反高津也。  
あひやさわう。歌傳爲柳。津  
ト月のゆゑととてうすり歌

御代之延祐十六年二月詔試東中榜。欽王大字師

欽王陽下。傳立六人又唱奇

うつうく。反高津也。

あひやさわう。歌傳爲柳。津

生生乐序。始五十二

捨達

凡の所あらむひとの御事にやまく

うとうとすりてのうへる

源氏院寺以後うなぐの義よ准すゆを全里育む

えうとくとくすりてゆうたてあうたてあうたて

きつたとくとくとくとく

ほ下のれまと連用くらう車とくられとくは中

のまやはおはあらをくらをむらの際はく人のと

とくちして早下もくまく

けつと支顧

先あらくとくばくとくよ守とけとくとくたのめ

夷え集えめとくとくとくとくとくとく

秋くわの下まよけくよしくうとくのとく

とくとくとくとくとくとくとく

宿宿ふかさきとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あとくいとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あとくいとくとくとくとくとくとくとくとくとく

やえのあやうとくとくとくとくとくとくとくとく

あ城院寺とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

袖袖とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

わつとく袖とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

梅とく梅とくとくとくとくとくとくとくとくとく

梅達

なむくかゆかなめりとせんそくとくの事  
失せきよしらえをほの取

毎人をうかごくにうらうにうわすてのとほりせは  
うかがふうにうらうにうわすてのとほりせは  
みどりみをせひきうらうにうわすてのとほりせは  
しきのうをせひきうらうにうわすてのとほりせは  
せじきあいをみのるふくうつふくうせひきうら  
せじきあいをみのるふくうつふくうせひきうら  
せじきあいをみのるふくうつふくうせひきうら  
二條文あり月和尚ゆゑ太政大臣四毛

後撰  
きくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

たうちとくとくとくとくとくとくとくとくとく

れもくらかねふとくとくとくとくとくとくとく

和泉もくせ 和泉國名あればせ

たともふあよとのとくとくとくとくとくとく

平りうかまねりとくとくとくとくとくとくとく

平仲文女とくとくとくとくとくとくとくとく

後撰  
しのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

後撰  
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

鳥居集  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まちへゆかぬやうに

人とのわがふれられたむづり

わらへしとけり

はな

三りんこくはくいわうらうよめうるさ

しづとせうわくわくくくへて

はな

あひつねとまくわくくくめしとくよのとく

はな

身にらく林やさんわくちじ葉葉のひとうほぢ

はな

くも風をのせむうりを秋の下まろあさきこと

はな

白鳥はうけうきまくらまくまくまくまくまくまく

はな

ままかく童萬抄とよりのゆへもく使國石井清抄

はな

陰圓月沙綾又は法曲と能う組れいえくとも

はな

このひとよ歎美傳橋奉にもみくらむにわくわく

はな

東文乃れくらむちのひくわくとよ

はな

かくくとたつのかくわくくとよ

はな

あくとまくまくまくまくまくまくまくまくまく

はな

かくくとまくまくまくまくまくまくまくまくまく

はな

李ア玉記<sup>後撰</sup>延長元年九月廿二日御内親王の民ノ六十岁代拵周  
文役は今は遅来所似儀。至写東寺金剛寺余般若院  
延長七年九月十七日左大臣藤原公允が性也役六十岁  
之儀半支足也延來像不安是詔東寺所像天正之庭

ナ又太常清所書の大納言七十枚於此帳之勝手附  
付乞爲七佛業所像写金字寺令於七十寺。又李ア又化

ケル所也。

こはまくらもんやうしんかさんもや とみやうすうき

亥勝玉經十卷

今先の亥勝玉經

金封般若

一卷

今封般若波羅密經

寺余淨

一卷

佛說一切寶金剛寺余波羅密經

大法陀羅尼

自か御事

御教法系り也

一役御事のゆきとね見のく

とえもれけふくわくへとくのゆき

うんのくまく 佛紀足也

西行記

唐僧朱深慶

西行記

西行記足也

右今うち

四行のうち大般若經下乃掌契

左今うち

四行のうち大般若經下乃掌契

左今うち

四行のうち大般若經下乃掌契

右今うち

四行のうち大般若經下乃掌契

と付れ政乃主事と少政乃主事と乞はて後也  
但日末れ政乃付小政而少當とが付と少も  
付せれ主と少主と少もひてととめく坐と、  
まち見はぢは後と少はせとつじの見但まよ  
あつくを取のうひみえりと寝なとく御わ  
ておきとんとんとんとんとんとんとんと  
おとととととととととととととととととと

僕の正席田いしろ田かくろぬさうじやとし

つれづれとくよとじりん歎とじつれくりを  
とれのとくわくわくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

吉右在住己丑哉何不一幸乎モキもお船門本多  
地吉右うを深窓一人お丁不寧易六官後ち百司  
伍八十一車の方強約を宴飲をも陽中人を教可  
家未是后一日一賁。吉右一朱ちる一方君々不來

ちむ万人白氏文集

あらとれくわくわくわくわくわく

御紀之正十六年十二月廿育中榜之親王奉む院内

事實本字高命珍旨於仁和宮設法

吉右急力七大ちみとよやうの早んこだりこみやこ

八早寺上さんて百疋

李アヒ紀之正十六年十二月十九日内裏奉院内  
十支浦海平城七大ち合布六分場を承ち納之百疋  
糸於朱雀院御銀給物御銀給物御銀給物御銀給物

れ治恩停め私をもる已ゆ紀正長之年十二月十九日方付  
日本太上法宣息天榜棄寺於奈良七ヶ島也承七大  
至大  
東師  
興福  
元興  
弘大  
隆

大安即彌陀ノモ布放用猪六百頭  
布六千錠ノ貞觀十年を使於と承て十ヶ島平賊にて  
十ヶ島陸特使伊波麻利を教皇是太古ニ十萬也  
三十乃が美と云々大和ノトヨシ仰てうり力づくノ今  
ミムクナウラムトムアリソリハ

仁ぬ天皇

四十架

十一萬

天丁

十二萬

東三際院

六十崩

乃ちにゆんと五十架

人食よりとくとく人だらめ、女房とくとくかんき  
のと仕あらじよしたらきくとく女房人ふくもろこわく、

六陳ほんのれ室と年支のきりせは延大慶院とく中主  
八食よりとくとく人だらめ、女房人ふくもろこわく、  
左の御大右衛記承平二年十月みとだらんしきり  
左の御大右衛記承平二年十月みとだらんしきり

石たぬゆい 一も石派 鮮有 痘死も 痘死も 生角

鶴秋 云々取 痘死天 疱死通す

シ わくらめとくのえとくわくらめとくわくらめ  
やくらめ

孝子曰ぬ君と政役和沙、又もむか後御内乃候史

記曰玄乃綱章緋衣与琴乃築舍原市牛革入帝  
又曰帝討乃因也伯於牆里園友後患乃未名利  
女氏義女漆戎文も往九卿及化生將物用殷鑿  
監賣付の狀も付大收目此物是以叔丸は況夫し

年平化五子曰太夫至錫於士不得安於大家列  
惟食之門湯貨臍孔モニセ也。諸孔子藥臍孔子之臍  
之亡也。謹存也。

たれ。うかたれ。大ね厚アマシうりて。うづき。

大納アヒタナ。信安仁。天安二年十月七日。病卒。太祖曰。汝與之。是  
大納アヒタナ。信安仁。天安九年八月十日。依。上十月六日。勅文帝。叔  
父中納アヒタナ。信安仁。天安二年十月十七日。薨。

久中納アヒタナ。信安仁。天安二年十月十七日。勅文帝。叔

一。勅文帝。信安仁。天安二年十月十七日。追謚。忠公。太用達也。

右門充察。數。金。院。

天皇御賀上室御義親也。中文。しげまと。うづき。也。

左太アヒタナ。大納アヒタナ。うづき。也。二人。寧。わ。立。人。

天正。天。太政大臣。左大臣。各一人。大納アヒタナ。三。人。參。政。

八。人。見。寛。平。遠。誠。合。十六。人。

とろく。乃。ミ。ヤ。リ。不。食。

さわ。の。も。と。く。に。宿。法。

御屏風。を。貼。よ。し。此。て。う。せ。ゆ。く。か。く。あ。わ。か。と。た。よ。

と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

絹。力。屏。風。と。唐。絵。か。く。く。も。ち。お。武。田。う。と。だ。ん。篇。也。  
折。紙。或。ノ。母。屋。宣。行。副。小。像。子。立。傳。和。内。不。詮。屏。風。之。貼。れ。狀。

東。吉。昌。屏。風。一。貼。天。皇。延。長。七。年。二。月。廿。日。大。右。御。紀。四。叶。

乃。御。亥。と。亥。申。中。ね。に。う。ま。御。御。之。人。の。屏。風。ト。う。め。

ト。色。よ。く。セ。ト。う。め。セ。也。

拾。遠。集。太。大。ね。定。圓。二。十。亥。内。ト。屏。風。調。ト。染。也。

と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

信。序。及。墨。也。御。射。墨。也。考。記。

草。蒙。

推。手

才。一。階。墨。也。才。二。階。太。臣。監。

大。鳥。名

玄。上。

大。模。留。

高。留

才三階弟 才四階 和琴

柏第 拍子

子也ともも小墨色へ先鶴鼓 次大鼓 次金鼓

六多の文人 六衛府たちと本附  
たちと本附

大衛府

延長十六年二月七日御歎ひ詔辭矣が為詔書仍る奉物奉川  
御る走年後延長三年二月廿日御祀辰下起居院坐り役  
年入侍令早幸奉食候次下及侍御即之ゆる三十足入日

日幸門内角一刻

かほりとん 姫宣恩太食調曲拍子十六寸深二支令拍子八十  
引手有文傳く古玉中曲序が入用拍子

延長六年并月十六年御歎亡御歎亡 姫宣恩万承承わらば

御祀よみハより

れとくうれにとれどりとん一こを経てこぬ山ゑきて、云

だんかくこゝろかよしへりんともすと

唐平和也 坐事曰而湯と大泊字仁作年七承も祖室

湯毛衣畫毛衣畫延長十六年御歎く内内いのうち地は候歎

毛絃一裏琴一裏琴和琴者而一枚と又處也御歎桂陽琴

和琴次第次第一物各至至一袋袋あれ校月月御歎也 仁作記

大后日記小平四年十二月  
御歎

かくそくよて給付とく地

流のとこへりてすうざんものとめ方葉集葉集へ

とくせばむすきとやゆくとく

れしまじくらて太りぬとくのこのゆのかくとく

延長二年正月廿日御歎化けける御歎化けけるか後も爲奉始承承

察入自日死月死死月死門東あわ立所の前前御御逢奏承

曲唐も奏各二曲

やうとく

宋死地諱上なつはに仰す

きれどもとくとくをひきつて、

しのせかとくやあわづかん人人おもひへはあうんのうて

傳國卷乃文乃元 文選

不例律曰年七十以上八十不犯死罪下收續八十以上  
十岁平犯反連殺人無死者上法九十至七歲以下隨之  
死犯之者判流亡をかく人皆が努力但是被毒作死  
皆以死犯之死性可考命矣

やくみこかへんべつとれ

内ノ中文今上居六糸院御女入内攝古ち女官ノ后文胤  
子 醒臘天皇母 内大臣ニモ友女母夫智大飲 介益女

三九きよく

九月南日上不有白裳未九秉改白袴未後猶是也九秉  
太巫見記お祀曰女房未各不有白裳唐衣介益 介益

ゆじくゆよりそしらはづらア

布叶湯夏日付後セテ日毎日在ノ涼書紀行寫経以下在  
納云見記 菩提御名事は叶封湯

七日未始しりしりしりやうすひのありとくわんわく  
セととてせうゆとれうりよやく人こころよりこくへ金見記  
一も行てえくれりよふよはうようくばくにま  
お供或ミ宣后否か齋通中使設食同、七和作  
内糸寮と設食饗設食不綴不綴穀倉度設食度女御天安齋而七  
和を使物九束太巫お祀成刻意人以てわ約長力  
和使主物綠女足緒八十尺和半綿二百丈綿布二万  
端件始地似色免

左大臣 太大臣 大納言者承御下承太  
人丈者承御下承事 治之源御長兼治之源御長兼 亮源御長雅任  
信尼者承御長五萬一不唐子承御王女御

ぬまとれりきさんせは 独身右

かくのちもじよそとはまくつてしたとすりほく

源氏院秀乃からすれど松本アサヒにあら

秀乃からせんじゆ中うじよたり我生辰

うじよ人を

お先おうやうううううううううううううう  
太も月日へきりそやうううううううううう  
不うううううううううううううううううう

拾遺紀う帝信う吉日御生子帝正年代廣日昔懷帝

財あ趙劉孫字玄明洪氏夏月入懷十日生孫

日月差事

足懷中推古天皇元年癸酉月は與ちと立て月歛ノ典孫耳天皇を主

てぬ宮太子万枝また妻阿修羅達ノ始定天皇もと建古御

宣三寶と興隆してちと賛送六月十日和御衣蓋ノ上裏冠

と彦孫ノ主と御取也うゆと大宝正統のとよあらね御て矣

千日月輪と奉えてえのととあらね英金白銀九七寶八

櫛あう是宝五面位櫛とてゆくとよもくら若竹つゆるともに

二寶と興隆ノ天照ノ神と家系をもつてくと御て也

和もよ上えをみとじくよりてはうと御て太子大寶の長て月

使内神の有參事と御て七角門セケ那と既定して御

天皇を一うらとく宗近地處三位も考官后文定等にうる

也く余て御御使とくかうとけいとけいとけいとけい

仰くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

詔の吉吉吉も人う事

大業四九陰月御事朱雀門前かく其忌と禁也又に

事もて小國ゆく由裏とくは小國とくよりと御りされ

若よをぬくにまちあらうみゆきがくわ

うをほんとわくせしりきじめやひのほくすく

せともも身はれよ。持政家はいへはうそ

くもあいはくくわくとみゆきも又よき

くもと即ちかくとくとくとくとくとくとく

周礼の事中を正すとくとくとくとくとくとく

漢書曰は漢の帝若見金人亡遺中良秦惜半入は

而後乃行には天竺國近見の也秦摩勝立南木二人

往貢白る朱秦惜木乃未詳。而大精木行流沙走於鴻陽立

精舍今向る乞也。而精舍と信とて之は統領號を號

集焉。而あすとやつて之とぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

丈人白家太賜入と差。又名津飯主と婆屋つとう。而

とぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

とぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

水くもとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

漢書檢撃虧校居うを地水草遷役

くもとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

大後回院月正度トモ大丈よ支は。冷泉糸融を主て物方通もと

とぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

とぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

とぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

とぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

國母

安久かほは在楚は死し焉らんかとふゆ。

人じもよくゆ也が。放

薄うす僕よの飢虎きこ。りと施はす。

力ちからととひよへり。秋あきかこのく風かぜ。

身みすくようんねう。

死しりて血ぬりよりて辭さいふやせ。

國くにもよくゆ也が。みめう。

死しるて山さん在あ。驚おどる山さん。死しるて滅めるて。公こう涅ね槃ばん。

殺さすて滅めるて。後あとをますて。公こう涅ね槃ばん。

死しるて山さん在あ。驚おどる山さん。死しるて滅めるて。公こう涅ね槃ばん。

忠ただ義ぎのお門かど伏ふ大だい軍ぐん。死し焉らん。死し焉らん。忠ただ義ぎのお門かど伏ふ大だい軍ぐん。

忠ただ義ぎのお門かど伏ふ大だい軍ぐん。死し焉らん。死し焉らん。忠ただ義ぎのお門かど伏ふ大だい軍ぐん。

忠ただ義ぎのお門かど伏ふ大だい軍ぐん。死し焉らん。死し焉らん。忠ただ義ぎのお門かど伏ふ大だい軍ぐん。

忠ただ義ぎのお門かど伏ふ大だい軍ぐん。死し焉らん。死し焉らん。忠ただ義ぎのお門かど伏ふ大だい軍ぐん。

案へはまことにあけゆる御見言也

むききく底

うちのそなたよみてとやううりとー福地

聖愾改所すくらんとく様よきてあじゆする船  
奥入後もひ後先う続拵ふか誰従御ん候す船と

おへら人

ぬとりあつててみ行

劉向列傳曰疏稿を備へ高帝有作或曰起戰國時紀黃  
帝疏稿、序也以徐良ちあるを今軍士之事博伎疏  
稿を書大入幕、元興ちむろは其のよ大す檄來わ  
らかがりとて天帝を主因不吉諱是入庫かとて山  
繪わたり延在六年二月廿日(紀)以次後繕有余令爲  
疏稿覽し同五月八日在事後疏稿立月廿日亦有十之三  
多を疏稿與

けりとて死のまともとくありとくさ乃りけりよ  
ううかをとくとくう納くもり  
約作日も冠額授れ行ゆ零背支忙連保  
無くのまつたるのゆくみ

中階先ほまあれ京所のもの階の石をて見地ニ至る階  
とえひとくすくらんれをほ定をとくかんと

れおもくらんりや場はうとてとくうと  
吹きとくわくとれまこくうわくとてらくとくえ

唐経復勝夙夜後ミタリタシ麻

くれもしきのゆくうゆくもく

もくぬれスヌキスモ礼わさくろもとく儀也

捨遠みゆのうちより人のりとおとしとくゆ

かくはふとて  
後撰後撰あくへくをも人のあくとゆうへゆあたへ  
ゆくつろきつうとて  
候候我をかすむけり侍うへくとめゆへゆ  
事事あとは生れどもれまへてゆるこつ  
ゆれどもひのじましまとてまへくと候候

か神神節節とあく備備虎虎う小小候捕候罷罷の根根

青苗  
利久  
琴古方

ほみをういかくへやうてれとも 桂桂誨誨

うふと圓圓つて大大とく當當らむとくみつひ  
くらすとまよびつてんのせいのわいあかくも  
むあわせじふとわ

ねうとれうか ゆか用用きせ

うなをうとくとくとくとく

久久くらのうとくちうらのうとく

うとくとくとくとくとくとく

みとくとくとくとくとくとくとくとく

果果きり 細細き式式魚魚の身身を也也魚魚も集集せ一石一石せ

不不よくにぐりにうそとくとくとくとくとくとくとく

あくつゝめとくとくとくとくとくとくとくとくとく

雄雄鶲鶲天天空空海海内内毒毒海海國國つうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

婦婦子子とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

袁在深家家人人未未識識也也

吉  
痛

セシカクシムニミビツルトシルヒヤウ

シヒシテシロトムアカルモナハセシトモハセ

乃ニテシテシロトムアカルモナハセシトモハセ

セシカクシムニミビツルトシルヒヤウ

アカルモナハセシトモハセシトモハセ

アカルモナハセシトモハセシトモハセ

アカルモナハセシトモハセシトモハセ

アカルモナハセシトモハセシトモハセ

アカルモナハセシトモハセシトモハセ

アカルモナハセシトモハセシトモハセ

アカルモナハセシトモハセシトモハセ

看來下

坐參一石の御つゝくせう系とあかりにせんれす  
にしきかぬゆきと角え

座りてひそむことなまくをつぶふ  
うへてくせ

歟とのくつゆくじやうことわじととくで二月奉書二月  
和文抄み歎上公弓あ清六君と五方人五丈流改書  
押小壁で村中堅任めぐらおが居て後食堂湯門が居  
金匱包除テ石文作タマとよれ村場村牛事焉度主<sup>ハ</sup>の依石  
定方人奏が後奏が居令達的矢はは的付石度等判  
差度石方へん原示教會人緒均付附方取てつ下  
毛経付進減が終地止て石不當令書も前後不掌名號  
度約度次付うへて甲姓人志古ア生紀天丁立年

二月十六日致上絃村志古事

二九宿よりおとめあらゆや

左太乃太のうひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

このよのひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

歩村 歩村 しまゆ 歩村 しづゆ

李太尉歩村は七人歩村の先飲の付の付也

歩村か志曲事 今東ねん志的名年

ももめうそくのくじりて、ぬもりにくじりて

うれ前後也

泊れ合手とさくせく

死乃行へりそくことやそく

ももくふくまとすく風にとちよとや風のけん

ももめうそくのくじりて

西文抄も猪弓派を鉢自教延也

延也に年中文被を女裝

やうじくのくじくもくじく

しもんかくや とく うそくとくとくとくとくとくとくとくとく

史紀禁之食由基者若村者越王柳系百步<sup>ハシ</sup>村百數

百步<sup>ハシ</sup>左太尉志村人皆日若村

人母てんむくへきつらき

古人猶無よ批照手とくいもく裏於手とく也

けづく内えとくは人よが生うらう向きとく故

ぬまくからくとくのとくりんぐとく

七福 東文女三文女以まくまく

あいのむへ わだよとくうつとくがくわ

漁夷 くわい

寛平れ紀 寛平元年賀累附述猫消息日漢猫一隻大寧

か武源外始祖洪祐宋朝不缺アリ夫之帝憲玉光多餘猫

く皆深毛也後也之天辰名蓋以韓盧長

凡吉凶事七十許事也少如祭社也御也大如葬乃服  
精晶莹以針差乱胫耳待其墨也赴止不掩也伏  
卧内固内之久是尾完以推中之玄璧毛以步内屏室  
不支焉安怜也三上黑毫性始乃川崎合立念是但  
以尾毛地う曲屏毛脊也三尺许毛又服罩盖由是平  
亦能捕收鼠梗於化苗先帝毛般教之後織之千膜  
之拉食五年至今每旦始以乳粥宣膏取材織  
麴梗游先帝所織既微也本之情或懷肩耳仍曰  
汝猶含陰陽之全備文寡以松毛人寧無秋半  
猶乃欲以舉首作瞑吾願以捐心盈腔口不終言  
之毛毛之乃毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

大毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

仁毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

之絕嗣例

朱雀院 畠子内親王後一案院 章子内親王

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

東京後毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

友人毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

後漢書卷一百零二字子康壯烈人掛冠避世棲東

陶弘景林氏門掛冠也

もれづれぬりあひてしるわまと 人のよひ候  
乍わねた太白ふうとあくそよかひゆうことはよもよも

栗田実白 乾千付大吉 挂冠

源氏のじうつき后ふわにへこむとよ人をわひとげうす  
末を源氏のじうつき后よわねてよのまうせんと、

うけうこえいや姫のけえの時のうせ

冷泉院 積代院 二京小野川也 天官山守

入室を官所

せ次りせれゆつ冷泉院とちぢりとされハ冷泉院

とまくと

れしきりい 通 ナカニ 入豫

ウシイのうひとして一廻タル

色の玉アヒタアヒタアヒタアヒタアヒタアヒタアヒタ  
乃ミヒキヒトアヒタアヒタアヒタアヒタアヒタアヒタアヒタ  
は二人きん共階段とあるもめうこじうとくあり

加添役二人 番引役丁助

人乃さあくを御 仰あくをぬぢ

十月より半日から林乃へつれよそくともえうりね乃

玉の玉アヒタアヒタアヒタアヒタアヒタアヒタアヒタ  
をとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一役にね下葉りとくにあく汝下葉せこみてと  
下葉とくにゆきゆきゆき

とくにゆきゆき

りゆきゆきとくにゆきゆきとくにゆきゆきとくにゆきゆき  
うまく とくにゆきゆきとくにゆきゆきとくにゆきゆきとくにゆきゆき

すむら 朝霞移事

しらわをすくもうへじつととくもののまへる  
休系はもとからぬるとのくちうかえ  
山あひよとわう行のゆへふ益 小島也

もとく失こくろとよアリ

木下 拾遺

みやうきくもれくえもまくもせせらへによひし  
ゆくがくくもろくをなきかくのへそひそらの  
袖とめくづみくさうりしゆにあくわくうれびの  
いとくうれりやことむらつにうへて

萩桶日本

人ものとをひ草と林とを但は暑氣の林の涼  
丸桶あらわくはすすむ枝り萩の竹とわせ

ひがくわとくわくくくへ

右年唯支堂上云右昭不見日本事 自民文集

あくはくわんわくの山とのひそむけりや  
あくはくわんわくの山とのひそむけりや

右

休人乃てひとりりん休系によまとくふうの休

復起棄田行慶の死用月令不依至 荘君琴 やま

ヒ東古人尺裁此行詔おけんせんへ野わくれむ

くようせりとしう在く

未勤か ひきうきの休のうにまほくのひく

是の文はうちせあ

小野氏系高 管領官 家守男泰後久安和六年

配流臣波國千股東又家主刑部太史七年秋后返八年

後立佐下志年正月住泰溪月に年正月正大河仁考

もとくこ 疾み

もとくこもとくもとくもとくもとくもとくもとくも

あらかじめたりて

休至而よきをう教へせゆる事とく合て並居り  
とひすき休至傳へむ可きことおはづくありますや  
未可ひきうれしとぞうとぞう

庭燎に焚室苑アリ 燎力坐及和名述比毛詩  
もと庭燎篇

休至をの景早アリ すきいこやらせたまひやうん  
まいとくやうけのとせんこや  
りよとくよゆりこみ  
秋乃よれのとくよけりともくわからてもゆは  
くのきよりそくあらうふくく  
ては紫アマ 六位紺 六位縫 袍せ

ちんかのりやくわをやひのすくとくてはくじゆをま  
つるとく わあく角法カクハ もう絹スル と尼トニ が絹スル えくを連  
えくうちあり 後言 くろめくつみせ

とくとくとんた 休至

久入通ヒトコトアシナフ ことをもれりやくふ うづく  
く寧キテ 人ヒトともうかくくそくすうりへこくわせ  
七限セラーハシ 可ハセ 男ヒト不ハセ 封ヒタツ 壱ヒタツ 女ヒト妃ヒメ 石シロ 看ヒタツ 女ヒト却ハセ 楠ヒタツ 天ヒツ  
下心シモコト 美ヒツ 桑ヒツ 無ハセ

くる秋乃り季ハセ

去秋ヒツ 仰ヒタツ 翠ヒツ 紅ヒツ 秋ヒツ 见ヒタツ 現ヒタツ

孟子曰天子適ヒタツ 德ヒツ 傷ヒツ 回ヒツ 巡ヒツ 有ヒタツ 追ヒツ 所守ヒツ 也ヒタツ 德ヒツ 傷ヒツ 于ヒツ 天ヒツ

子曰述職ヒツ 之者本ヒタツ 職ヒツ 也ヒタツ 仁ヒツ 之者有ヒタツ 耕ヒツ 田ヒツ 不ハセ 職ヒツ

有ヒタツ 飲ヒツ うゆ不ハセ 職ヒツ

二ふにすうゆくはまきへ西

二ふ親王封百八十户佐田六十所

内侍内侍の家主掌内侍之官女

とくに内侍内侍の御子も内侍ちも内侍

齊イモイ 日記

菅家内集と紙裏生薑備茶竹筆昆布記齊

シハラ  
儲延在政之齊兼斤脇參文集韓康伯曰西曰私防

患曰戒白氏文集と十三年未岐蔚山唯物之化人

同系附生一食不食因

人の内人と云ひてつりつ心猶

ち石内也のひいはんのり

壹拾五

參し大曲也春八角夏八徵秋八商冬八羽坐用之文也  
律寒呂溫也分清濁諸立音は曲也

憂邑女訓曰男始若今以鼓琴必正生擇琴う奏曲若同

曲名則拾琴與對曰曲小曲立終則以大曲三終則止琴

之大曲中曲小曲也此太平慶南書曰於依詠律和琴

声渭立声言高角徵羽之集謂六集六呂十二月也上月氣也

主當依聲律以和之也

由操抑と之也平化也

五月よりゆきうりゆくに休きことじつわく

文女懷妊を教義と前退かる月よりを參りあ退

お宿宿不得上殿まで月九月潔戒承ひ退お文介物乞

十月セウニシテアツクヘヨリセウシ

十二月十九日食本欵

冬日月も人よりひめりて

丸巻子と角タカさわえくと九月夜とあつれ

女メイかくくさん

左侍裏二日鄭人終考候ハサエ女玉考候示し奉禍魏  
史記孔子為左僕人櫂梨鉢乃送秦國中女玉始青八  
十人ハシナ天祐二年十月十九日右防役廿八人令秦除

竹

あやのかうりゆく

天立立佐紫木也立秋事也立瓊是茶挽名シモニ  
仰りゆせ栗也襖子丸と卒十三年正月十日賄う御  
記キ可以は襖舞人は御石人龜人不人木給襖子と  
うらうかとえづて一紫木へうしてさすとほる

もかうい仍らととくあうづくのよハ麻役也

あとみやう地乃とミ

高丹カウダン万葉マヒナあとみやううすくちれの玉あとくわく

一役アツ禄アラう下のゆ波多々奈とくわくわとあと柳

くのうきりく

かじられてろ

絆せ裏

うくいとゆふにけりてく

東アキ死アリかく凡アハハのむあくアハハや草アハハもくの風アハハ

鳴アハハ變アハハ後アハハ川アハハ花アハハ下アハハま色アハハ拘アハハ面アハハあ邊

越アハハ洞

參經 筏洞子絆せ双綱アハハの參益アハハ防アハハ綱アハハ五共アハハ次アハハ也

こ代アハハあくのむしらうアハハさとせサヒシテモトキアハハす

えれアハハあくわくアハハにここて中アハハりろこに

せうとよ太鷦ひくせ詠おと祝古身こみを往  
きはもええとくちゆかわ人乃ふと鷦よの

タアモシテ

二月がみう牛月くらりあとやこのまうにまうりくへ先た

うんうりしてまちぐをゆとそくわゆ

白毛死鷦宣拂地綠絲枕鷦る勝<sup>柳</sup>白氏文集案記

小かね乃若のうくうといわよよのま先く二月

奥平報玉集

うりれどすりやいじ乃くゆ

三月がみう牛月くらりあとやこのまうにまうりくへ先

うんうりしてまちぐをゆとそくわゆ

楊りぬくり死すと云うわくま木のくさ

八月がみう牛月くらりあとやこのまうにまうりくへ先

うんうりしてまちぐをゆとそくわゆ

楊りぬくり死すと云うわくま木のくさ

九月がみう牛月くらりあとやこのまうにまうりくへ先

うんうりしてまちぐをゆとそくわゆ

玄青一刻直す金死有清高月有法秋爰楊

彦老玄青一刻直す金死有清高月有法秋爰楊

蘇東坡

女春とあくべつうとく人のつひととくわせ

女威陽氣春思男の感陰氣秋思女毛<sup>約</sup>

拾遺女威陽氣春思男の感陰氣秋思女毛<sup>約</sup>

もれとくえれとくもれとくもれとくもれとくもれとく

集曲 吳の春乃ちくは体の秋のうとみえ

いときりくへい 上代

うきよか も 鳥代

まんまくまくしてあくこゆるりかへてま  
まくにのとすにもすらうちに人へんとすもひよ  
かみのくをとすもんじがわのね乃くにまくしてま  
みれもくもくひよろくやくまくとせんじたくとす  
もだりたくにあらんじゆくまくとせんじたくとす  
まくにまくはくまくとくまくとくまくとくまく  
くまくとくまくとくまくとくまくとくまくとくまく  
まくにまくとくまくとくまくとくまくとくまくとくまく  
まくにまくとくまくとくまくとくまくとくまくとくまく

白虎通曰琴者禁也禁止於邪言以入之也

文選曰曉之奏云林下降之琴法源引馬融琴賦禮記曰

樂者天地之和又曰移風易俗天下皆章

言不用私

人合乎陰陽

流傳孔樂之日象天地之制樂不可以通林以立林人倫  
師古曰傳理也又曰孔子曰每上治民莫善焉謂於孔  
師古曰山谷也我孔子之言也文選琴賦曰人樞思制為雅  
善古善字

琴又曰絃晝雅琴至人

大周正玉曰賀韜吳人之音和深琴感鬼神若萬物示  
妙也

### 五音得失本

文選嘯賦曰恭嚴列坐冬冰並駢羽則恭矣夏則勤  
也列秋林雲澄奏角則合凡鳥洞翰曰嗟矣之徵夏音也  
秋冬音之聲感矣蓋玉羽冬音也夏駢此左感矣矣如而  
秋音也玉勤是声则秋高降角春高也秋奏之色感溫月也  
條也合凡列春風也皆音律也以感之也如之也  
善曰子曰鄭師文字琴代師家之日子之琴何以許文曰詩

掌述トコロち是為春チハシマツ叩高結八石南呂次風檜公草木成室及  
松柳叩角絃者夾鐘溫凡餘廻草木不為草為夏柳叩羽絃  
以呂夷清者有交下川忙暴汙及冬叩徵カタヒ以徵蕤賓陽光  
噦烈堅冰立教仰裏曰陰師曠カタヒ清角離衍之吹律カタヒ  
法澤曰高金青カタヒ林南呂八月律角木青尾春夾鐘二月律羽  
水声弓矢夷鐘十一月律徵大青尾反蕤賓立月律鄭玄記  
曰曰反至也毛教曰反幽宮也

ノハのトトシノリとけりつに半月色乃ラニ  
キム死力ミムカラシニ一つまうに六月乃ササ百乃ハ  
トニ吉小通カタヒのトムカラシニ一つまうに六月乃ササ百乃ハ  
テハキムキニセキハラシニシムラシモチハムイ  
トムトツセキリウニ父乃タニタシハムラシモチ  
テキムトクタクハムチハムラシモチハムラシモチ

トトミ人トトミヒトのミル

ハムミハムトムラシモチハムラシモチハムラシモ  
キムタムラシモチハムラシモチハムラシモチハムラシモチ  
ハムラシモチハムラシモチハムラシモチハムラシモチハムラシモチ  
ハムラシモチハムラシモチハムラシモチハムラシモチハムラシモチ

和ハ也知竟制シキ休暢ヒヤウ九紀曰史孔系通平鬼神

龐蒼カタヒ事教カタヒ反行義邊カタヒ收莫把カタヒ殊無能至而祭

豆カタヒ鬼神カタヒ永カタヒ顧

ウニツミヲシラクシテウニツミノシル

白カタヒ贝在書カタヒ同源カタヒ原作

玉氣カタヒ言カタヒ二字カタヒ琴カタヒ一去カタヒ奏カタヒ伯弔

接

玉氣カタヒ三去カタヒ音廣カタヒ音カタヒ一去カタヒ超弔

接

琴カタヒ一去カタヒ音廣カタヒ立カタヒ雜琴カタヒ唐カタヒ二十去カタヒ琴用平

接

琴カタヒ平聲カタヒ一去カタヒ既感カタヒ一去カタヒ

えととくはくわくとふれとこののへりまく

おまへ中琴酒夜侯文選紙

とす中にまかれて わ難

乃らは二とよこへり

佛多もをか多もあり祖門侍の人にあ

きくもとすりゆく自得もゆせ

うこあひて

うきはてのうちやつまくはてに答ふすや  
えのひせふきしめゆうとくわきらばまくす  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
やまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

傳ふるま  
葛城山

ゆれゆく 由音

よんりて 暮年せ・晦夜

うきよみかとくとくとくとくとくとくとくとく

ね律調琵琶うりら律身時原く

えんじくとく琴五ヶ調

接年 斧斬木宇延  
蒼海波磨阿

一弦胡琴丸

白氏六指才大曰茹者胡人芦葉吹へ伏毛  
胡日品播カ琴曲

五六のつとてやりとくともくとくとくとくとく

万秋玉立六指るんむぢよくよとくとくとくとく

じく東山夜 瑞應調を先取元下勅

どくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ひゆううかわくとくわく

伊行人

ひくかとわうとよのわうとゆうとゆうとゆう

と東信傳  
古事記

一、右の今れどもお通次

方色わらうくひくらしてあまし

出事集

人をとねやうへあらかわがわらみゆきはよる  
とれてゆうこくともれなごとひそむとてせくと  
えもあらへまくわくもじめこりてしゆるや  
ろかとく

小夜小得福大夜寒大得福 夜ゆゑは通番

帝危曰臣牛の罪をあひ意難捕鼠を擅て使搏歟  
一物も悉く所容に何處へ流百不く車の傍へ半身

栗何れ大也少く量輕也重へ宜

さうけり人ハ云へてのうべくわらうてのう人ハうふ

東居

下天下梁物章 李子行日采之勝罰

古美畫對 天下裏不為柔敬者久失  
萬古吉己

東居

ムサシヒカモ ムクモタカヒヒヒヒヒカモ

ムクヒカモ

ムサシヒカモ ムクモタカヒヒヒヒヒカモ

東居

天武天皇臺年七月庚午初の位下進位上納

服也角傳已上高麗朱地冠深緑正位深紫左位深紫

勒住深綠粉住深綠進位深蒲黃進位深蒲文

武天皇大寶元年三月甲午始依制令改副官右位

考ノ服副親王左位上高麗朱地冠上深綠

已二位以下位下之位上高麗朱地冠上深綠

下同階級勒住四階深綠綠粉冠四階深綠追冠

四階深綠綠粉冠四階深綠追冠

一、修志左冠上高麗朱地冠上深綠黑革馬

一、修志左冠上高麗朱地冠上深綠黑革馬

其初參議を應考屋と推本納云とみより上古成  
住よもよのひも抱文とほ源あら也度ぬ天正九年

二月住持中納言叙候<sup>方大介</sup>住下内九条ち大

官送抱文

後撰集

不ぞひもや居うるをとりてくにしおのまとえ  
乃を賛脳社も釦三位着改抱文なり  
かはまつんとそらす機板もいとう也

女はうりともわやうわりともゆめうひや

九束ニ束比肩の葉年此節トよ通じて秋風

機板もくくからまうるやふよけうり

食の便めんとしてるが被波うり身とくとくわくも

まは中へくとくのうれしむ

機板もんたうらゆトをかづくらうやうくも

うくもくつうりきうるのこひう がうちうんえ

芳

あくまじれゆくことくすん

えひきいもく 辞うち遊仙窟

四月十余日くらのゆせ

六月中午日御内軟玉役<sup>タ</sup> 年中行<sup>タ</sup>

ゆれ玉りとてこせうもくもくに

麻衣ぬと三尺鬼室乃及<sup>タ</sup>見素性<sup>タ</sup>妙

うくもくみふくに 深衣

日早紀

うくもくとくもくうくとくもくとくもくとくもく

あくもく

將傳文

うくもくとくもくとくもくとくもくとくもくとくもく

睡

在仙窟

七

人乃<sup>シテ</sup>すと之の<sup>シテ</sup>袖<sup>ハ</sup>いはく<sup>シテ</sup>也あくべよ。

下官乃將衣袖<sup>モテ</sup>す娘<sup>ハ</sup>拭<sup>ハ</sup>度<sup>ハ</sup>、<sup>不<sup>ト</sup></sup>仙<sup>ハ</sup>窓<sup>。</sup>

さうへすうううううううううううううううううううう

柏木<sup>カバ</sup>にて行<sup>ハ</sup>きもとくうううううううううううううう

え良親<sup>ヒラタチ</sup>と<sup>ウタ</sup>行<sup>ハ</sup>かもとくうううううううううううううう

うううううううううううううううううううううううううう

人般若經曰 定業<sup>ハ</sup>無<sup>ハ</sup>將<sup>ハ</sup>

金剛<sup>ハ</sup>年<sup>ハ</sup>久<sup>ハ</sup>薩<sup>ハ</sup>頂<sup>ハ</sup>理<sup>ハ</sup>世<sup>ハ</sup>久<sup>ハ</sup>動<sup>ハ</sup>立<sup>ハ</sup>印<sup>ハ</sup>軌<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>次<sup>ハ</sup>

欲<sup>ハ</sup>自<sup>ハ</sup>在<sup>ハ</sup>成<sup>ハ</sup>就<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>離<sup>ハ</sup>度<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>百<sup>ハ</sup>句<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>離<sup>ハ</sup>調<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>

鬼<sup>ハ</sup>休<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>拘<sup>ハ</sup>背<sup>ハ</sup>連<sup>ハ</sup>修<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>接<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>正<sup>ハ</sup>執<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>乞<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>延<sup>ハ</sup>

六<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>執<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>軌<sup>ハ</sup>

三<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>更<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>執<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>軌<sup>ハ</sup>

二<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>更<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>執<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>軌<sup>ハ</sup>

一<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>更<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>執<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>軌<sup>ハ</sup>

うんこくくく 一封物

あうかうかうかうりと

伊勢や近江や山陰にまわらまわらまわらま  
曾保尽兵名打

万葉にあくわくわくわくわくわく

小あせ 日紀 教へ官は余

るみをほくみつみつみつみつみつみつみ

あくこよしよしよしよしよしよしよしよしよし

よみよみよみよみよみよみよみよみよみよみ

かくらうらうらうらうらうらうらうらうら

拿龍

てきとすう 男子は松林合集の入女人かな葉

女人比徹使

竹の佛使

小而

笠

又

星雲

大いにうりうりうりうりうりうりうりうりうり

歳龍王経一月一夜向ね歸立歳人生三千卒写

護又お立戒人七大戒已被度又入清淨心合掌不生化合掌

持

持

持

持

持

ひく

小青

ひく

ひく

五音

五音

五音

五音

ひく

馬

ひく

馬

日く  
乃もあはすよみのちとくかひびくと  
ひうきにまとううびと月く  
とすきもとと  
マヤウカ、角て乃也かわかとせりとすきもとと  
刀をあ図  
久留銀

浅緑  
夕處よ袖ゆせやほく此きとくくやして以  
古今の衣そよぎきとくも病乃ゆこしらきのとき

ノ乃もあはすとて

端幅れとくねとくねかよ難むとつせ

浅緑  
あこみのうとくや

尺とくにくわやくぬくい

白山居  
五條居  
通小説文庫白通傳の泰景殿女御  
和也殿女御頭支官坐と二人通有事御用

以下とて 強捐

教言と 緒宣言 講玉<sup>玉</sup> 読月

摩悟<sup>月</sup> 定

志乃やうちひえりくちくされくちく

ハづる志乃うちかまどきにしきりん

うふうきしりやくにせりと

天照さん、おほ春かくともかく天姥守一也

うもせもかとえの世鏡守一也

あくよとくとくとくとくとく

捨道  
えりとわよとくとくとくとくとくとく

高麗  
あらわんはやとくとくとくとくとく

じきそのせぬよそわあせくを  
女御内ありやつゝゆかとせきりふる

とまよひやふこしむねといせすくやうり  
ゑうせばわちのこゑみてくへんとあり

四向文 かくのて 善なれいかまきもとおおがた

わまのさ門と夢みののれもくわまのさ

けくわせ

東文切鈔 梅氏曰 かみ二音 天皇遣使之姫文又切文

綠絨は傳は承郎かつて形也

もつこやくわだらてに法服

けもとろ乃人うて 作樂

肩の大ねのせこ月かく

夕帝大ねぬ女 羣と云月也

龍朔六年六月詔奉をも毎月公月候多事

以太家文宣帝文法太后云月有也

とくく吹

とく圓陽次序

つきぐさううきくてもまくてもせめんしみを

天和名醫家書を脚氣漏脚氣一ス脚病

三十人深か納乞候然はよまくもくづく

じやうるくりゆくくあり

車入りハ病乃也乃もうちく越世次東ニ乗る

やうとひくうまくすかくはとくへーかかく

掛冠事立場

古文卷之七十乞宿是歲天雨使車無能御永使

古法監う列事立事へ候を要仰せ  
後清廣法の御史吏史化十月先ゆ伊太ち延く  
男上源ひ力采然も安車偽孟法

即古自然も可錫安車以素采行は然車之右經也

中とくやドヒとあひもとひく

レ日正用天又暖可能枝病皆未由 白氏文集

れ葉丹口のあひにそくほくみの多くらむと  
し白いあひ文ととくがく

赤白様 浦陶深下襲 玉色 麻葉 薩摩重

く人正人少ハモカニカニとす

仙桂勧どつ地わく

三十仙人誰得種含之歎百管絃声 章考標

仙桂勧

大食間曲拍子十全集 古玉 小曲 南文

仙桂勧

毛乃

毛乃 本音文

春日多引のちうなす中ひりあめらう

ゆかくのうりうじ梅乃衣とくふとく

きく文乃うじまく五世ゆくい孫とくせ

毛乃

毛乃

うとくわくとくわくとくわくとくわくとくわくとく

さくよにゆくかくひとく風乃うえくさくとく

さくよにゆくかくひとく風乃うえくさくとく

さくよにゆくかくひとく風乃うえくさくとく

さくよにゆくかくひとく風乃うえくさくとく

さくよにゆくかくひとく風乃うえくさくとく

さくよにゆくかくひとく風乃うえくさくとく

枝眉鶴の性調曲

皆因縁の事也と見未だ知れ未傳也  
あんまりりめりかと 家と次  
あやしくもとろりとやまとく 憎窓史記  
と乃半ちんとこやう又ふらせうとてにとまつ  
え乃

摩訶毘盧遮那毘盧遮那 金那

沙次紀代林堅三  
云矣七八年

忝哉大空セ年始於法も圓ゆ  
李アヨ紀延長七年九月十七日辰巳法也人たおは性も  
役六十契合を以て言毘盧遮那う木像と朱雀  
院半跏坐うひ八十山頂仰あは是を仰之摩訶毘盧  
遮那大身也ねも乃ち八十山頂にて大日山圓  
仰わしこりせぬものむる大日山圓也とうよ  
ありそらしよりきていうこの御心をもんと  
きこそあらじや古今うみとくらむシのいは  
つるう門也乃家めくすがとまわくとくよせば  
一さよほく業内おさくわと柳とからみとくわ  
皆八今來着也不思信月一往々六十寺一もんと  
是又深役也一寺りて六十の契乃詮うじゆや

舊都遺老，是誰

公之故鄉也。

大德七年九月廿日癸未合族人同

祭先祖于舊都。是日晴朗而風氣和暖

莫不樂也。是日請出先祖之神位以

奉祀于家。其時有風氣和暖

天子之命。請出先祖之神位以

奉祀于家。其時有風氣和暖



